# 拾遺都名所圖會

龍書

291.6209
Ak
2

0382

拾遺

# 都名所圖會

龍青

二

291.6209
Ak
2

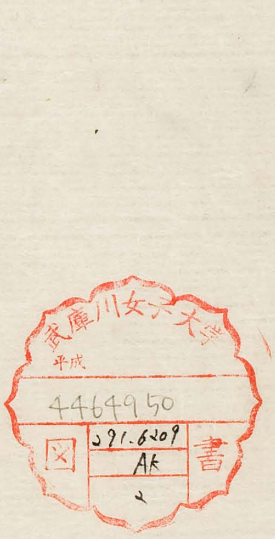
謙市文庫

# 拾遺都名所圖會卷之二目錄

## 左青龍首


祇園削掛塔
祇園香奠
螢嶋
泰山府君
祇園女御
崇德馬場 宮辻
山之井
嫗堂
地藏院
九重丹楓
日親廟塔
同 神事
二軒茶屋 合餅 ほ水 阿蘭陀人休息
直菖原 長樂寺碑銘
捨山王
鷲尾
桂橋寺
藻蟲菴旧趾
大日堂
清水隨水堂
秋葉社 師要君 覺明水
通妙寺 妙見社
千文稜
知恩院 補遺
歌仙堂 名大雅堂 墓碑
疫伏社
雲居寺旧跡
靈山寺
鼠堂屋敷
仲光院
尾振谷
六條院陵
良經公碑
神輿洗
太子水
芭蕉堂 南無庵 芭蕉翁碑
蓮華院舊蹟
高臺寺 神遺 天滿宮 萩花
學自堂旧蹟
經書堂
寶德寺
南藏院
延年寺辻子
法國寺


伊澤
喜多八重子氏寄贈



袋中菴
阿佛家
城東寺
專定寺
泉涌寺 塔頭
薬師院
万壽寺
海藏院
法性寺旧蹟 同觀音
晴明墓
極楽寺
勸修寺 元中十五年
大石屋舗

赤染地
西福寺
平教盛家
智積院
雲龍院 来迎院 善能寺 成光寺
瀧尾祠
俊成卿墓
月輪
羅刹谷
獨鈷水
稲荷山初午詣
山階八幡宮
田村將軍墳

安祥院
焔魔堂
上行寺
新日吉社
安楽光院 観音寺 新善光寺 悲田院
五葉辻
自然居士墳
光明峯 光明峯寺跡
藥師堂
昆沙門堂
小栗柄法華塔林
三條右大臣墳
野色山

西光寺
六道迎接
窄岸
劔宮
常盤前宅地
三聖寺
西寺古蹟
地蔵堂
遣迎院
田中社
明智光秀亡蹟
西之山巖屋社
小野隨心院



萱尾社
北栗柄大神
牛尾名取山
白石明神社
白河寺
梅本寺
東山寺
四宮河原
業平谷
阿弥陀堂

腹帶地蔵
大宅巖屋社 大宅寺
布引瀧
白石菴
三宮社
花山阿弥陀堂
神無森
諸葉山
奴茶屋

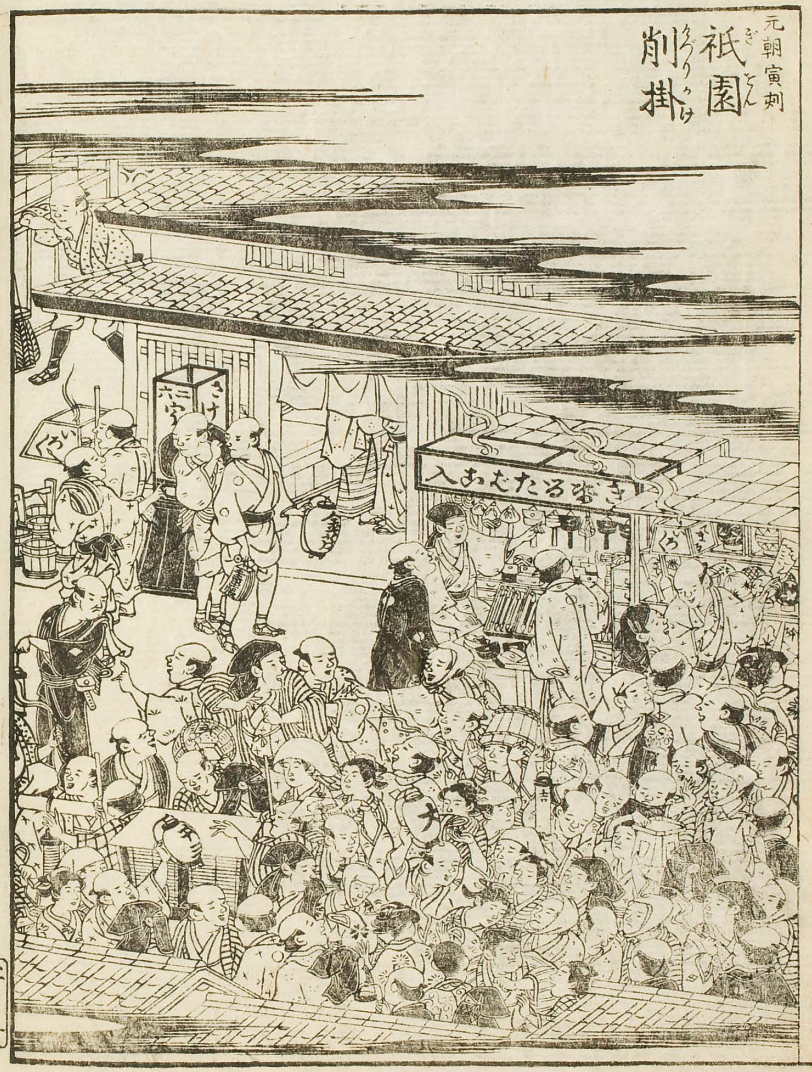
内裏サヒ
興福寺古跡
蛇ヶ渕 撲金屑ヲ藍觴
蓮如上人墳
花山稲荷祠
元慶寺
鵠坂
十禪寺
地蔵寺

外山
妙見社
法巖寺
實如上人墳
大石斷食石
僧正遍昭墳
蟬丸塚
人康親王旧跡
護國寺

関西金銀不用箱崎町境

名どころを
ちしを都ゝ
菓内者
圖舍
そらくも
うつし画
湘夕

元朝寅刻
祇園削掛




ぬる
新の
垣城
さらと
清めん
削かける
新の
注連縄

祇園神詠　洛東祇園午頭天王の神祇詠とうんけ神詠ようり近年桜樹
故奉献して社頭に櫻は年多し
三葉　祇園に詣ふ子を空の桜花さうはう人の歌もさうへうん

かくし藩の梅　當社神樂所のおほる
紅梅の名なり

かくしはなく毎木もほほ人梅の花　宗祇

今昔物語云祇園は山階寺の末寺なり有名なる祇園の東に地蔵
寺蓮華院といふ寺あり是は祇園の別當良兼と云者ありしの蓮華院
の堂の前に微妙紅葉の有りしを折ふせ案内しして折りて
別當いとそ天台寺の内なる木を折ふ事は非常のるしと良兼を使を立て折りて
其木を伐みふ伐て来まと従者伐やすくなる程ふかの茎義院の法師これを怪く
従者の来ぬさるふ其紅葉伐根際より伐てくり良兼よく嗔てくる給ふ
横川の慈恵僧正天台の座主にて殿下の御修法に法師寺に至しくるふ給
給くしと若くれは座主大に驚せ給ひ良兼を召ひくる良兼放言し
て来ることくれは座主之門の所司伐呼下して祇園の神人等一統に延暦寺に
隨ふべき寄文を備へ其に判を加へよと責くれは神人等責られて他て判伐
加へくり新して後祇園は天台山の末寺と早く別當良兼と追放さべきと
座主より仰らる良兼はこれを聞くもせず権を儲け軍を調て待くる間座主
弥嗔く西塔の平南房に仕くる僧荷とて武術第一の人と致頼の勢に入洛
却しくり其後ようは僧者を別當にして良兼を追しむるにそろふ故なくて追
百首　あ人坂の板より板ふかとそくり祇園精舎の表乃曙　後成

祇園削掛神事　元朝寅刻之社説に曰　毎年除夜子の刻より社家
天照皇神の御祭事とう
の諸人雑言を恣にして他人を誹謗を假令其聲を聞其人を知るとも
ちしを事に是を恨と邪義の板にして勧善懲悪の意ふくんら其雑言に
勝る方迄年乃吉兆ありしと系詰下向の道條にそも放言する紙世
俗謗て是を削掛とう祈神夏を世の刻計に社勢執行腰輿ふのる社
司前驅して社系に執行に拜殿に昇て神前に黙坐する年少時ありて
往呪を誦　天下安令祇禱る東西の欄に内に削掛の木を左右に蓬
蒿おのく六屯ちに即十二月の粉に表を時に是を燎て其烟の靡き
向方を見て今年五穀の豊凶を占厭后社司新に井水を汲く削掛乃
尖をふくえ朝の神供を調に是新年の初火と改るの義之系詰の諸人も
亦其火を推て家に飯をえ朝の膳を煮へ
千文板　三月十四日當社にあり社説に曰寶錢千文と地くに鯉うに神を板に
の所謂うりくを世に誓文くしてふ俗言に
神輿洗　五月晦日六月十八日に當社の　十日夜に入て四條通大和大路のやうり
神輿を洗浴むるの謂なり

祇園社間ど掛の神事ハ例年元朝宮の刹ゐして社務福寿院あ敷小於て法華をこゝ法其四方ゑゝ割掛の本十八所ふあり法樂終てぬまて おれふゝを猪し四方へ配しゑゝ水を吸んくすを足法陽和順のたゝるしとうやかの割掛の火を糸掛のゝゝ火縄ふうゝしゝ家ゑ携ゆりてえ朝執蜜の焼火とゝ是をん其



牛の疫を免ゝ
為ゝ
ゝ

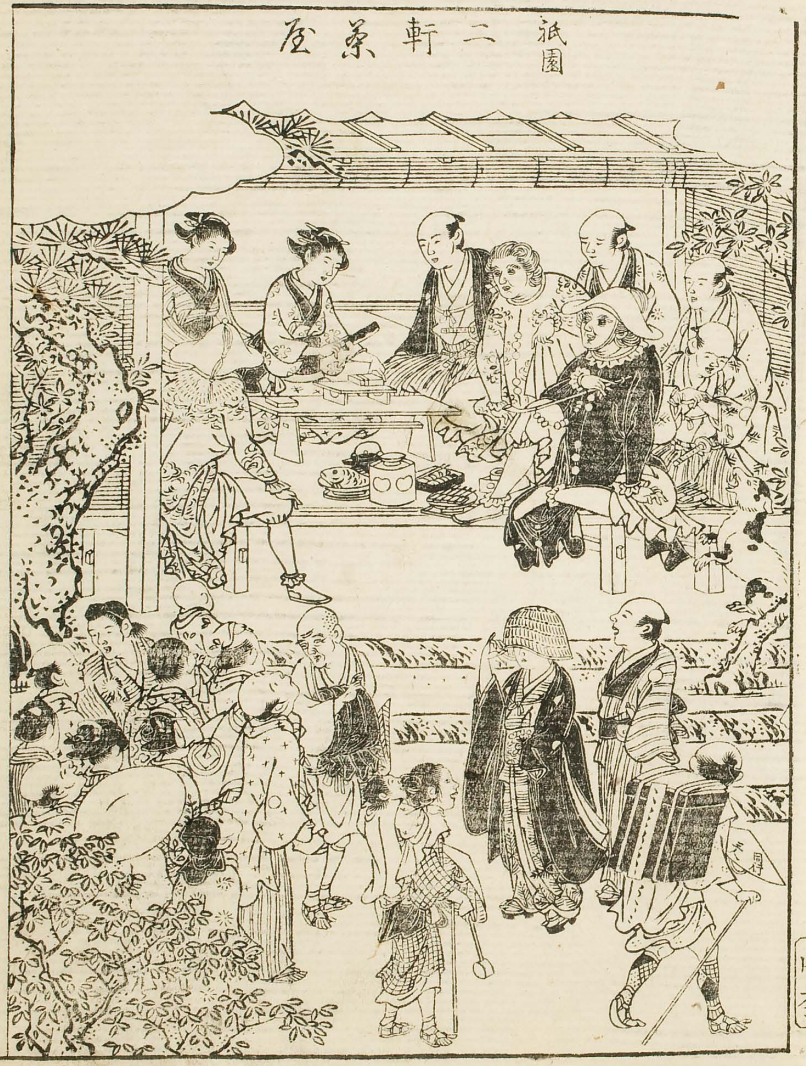
まで舁出して祭事を執行ふ日の中ふい壯麗なる葛衫を揃ふて沖迎挑灯乃数く跳物ハ大篝ふ烈さを加へ祇園鴨川の妓婦女伶の輩月ふ譬花ふ准て之ふ〜ぬ風流放ちたくし頭ふい珠玉を鏤め身ふい錦繡を絡ひ女を髪のかでさう〜んこそこいひしを露さ〜ぬこそして刹唐しむくつけ乞断髪魁頭と変じあるふ色白く肌ふじのきさ〜ふ肥あつ〜つきくるをなの〜ふ〜相撲取ぬ〜〇びして翠の簪を髪毛ふ額ふい角を立て大花前ふうろ女しもつんだ嘻し顔ふ出さるる〜ぬたふい面ん〜ふきまる雲の鬢ふ結ひ女沖更衣の艶さる姿を摸し二八ふ〜ぬ英歩年の道ふ扮ふ百〜七の姥ふ優して日の斜ふ祇園の花街を東へ通て沖社へ跳入るさぬ足をんんて都鄙の人〜辞くらう〜くまてのまゝ横ひさの假店を廉を巷て浮浪放蕩の類ひざ〜ぬたてすり祇園林ふい棧敷を構て所せまで連をあ〜あも世侯今やくこ〜ぬるところふ前雑子の琴三弦後ろやしの鉦太鼓ふ競ひ集る英著をいとこで群を成大活ひ人のふふて日暮ま神燈のかゝけ騒闐く縉張紙細工の墨〜灯

坂輝し嘯物のあきみふ附さうとされべ洛東の祇ひ日ふ勝るふ〜ぬされ皆神の徳さふ顕さ治國平天下の沖時ふ値て萬歳を謳ふ慶の聲ふるべし

## 祇園香奠

祇園の名産ふて世ふ名高し西門の街ふ製さる香奠四五軒あり竹器ふ入さし坂售ふ下河原の茶店ふい香奠を立てつ〇ふ出て社頭の前大花表の色ふあり〜ふ〜へ茶店ふ鐘ふ〜ふ〜湯を必し香奠坂立て社系の人乃休息所ふ〜ふ具盥觴ふ年暦ふ〜ふ〜ふて詳ふえまで〜今〜ふ百八十年ふ慶長の〜東方ふし建く東西兩還のあり〜れを二軒茶屋と〜むしの例今ふあり〜ふ朝ふい祇園の社中ふ〜ふ〜ふて王服を祭ふ初ふ鐘ふ西方の窮ふ伝ふて秘藏ふ〜ふ〜れを〜ふ古代乃祀ふて胴ふ紅葉唐ふの摸様ふ名坂紅葉釜ふ〜ふ〜く毎歳六月朔日ふい炙餅坂祇園會鉾乃兒具外系諸の人ふ〜ふ〜ふ〜

阿蘭陀の細工ふ
我國の
祇園豆腐の
やうこうふ


祇園二軒菓屋

知恩院本堂　昔は大寺影堂と称し東西廿二間又八南北十七間二尺又寸瓦皆南面勅願大谷寺と書して後奈良帝の震翰あり

本尊圓光大師影像　師の作自作なり居敷に修補の時の記あり其中に根本作自作同四十八日作同帳供養の霊像なるの文を又真影の花右に圖とあり所二天童子弥陀三尊東檀中共に安置僧都乃上足寛印供奉の作なり

頂戴大明神　毘沙門天　圖光大師作の絵

釋迦像　堂後に圖を絵所善導大師像　長二尺弐寸是則自作の像之

の持尊なり

神變不思議佛舎利　堂内に安置の神変の名義は義山上人舎利の記に

又八方丈　東西十七間半南北十三間

拝間　金張付松に鶴の極彩色

上段　中彩色画工同前

佛間　阿弥陀尊の之像玄安寺阿弥快慶の作之

蓮花極彩色の画は狩野主馬助尚信乃筆なり

中段　張果郎

金張附松に鶴乃画極彩色

下段　狩野外記信政乃筆之

鶴間　金張付画は梅に雉松に鳩極彩色画工は

梅間　狩野奥意法橋定信筆なり

尚信乃

菊間　金張付蔵の画極彩色

鷺間　画工は前

金張付　柳に鷺の画極彩色

柳間　金張付柳に燕の極彩色

坐禅石　大方丈の庭にあり昔義山和尚此石上に坐禅しるしとて此石初は山門の下にあり

鐘楼　本堂の東南にあり方四間尾普延宝六年十二月十五日供養あり

洪鐘　高一丈八寸直九尺厚九寸又分銘六字名號霊巌上人の筆寛永年中本堂の東にあり傳大士普建普成を安置後徳川家の福別所に元和五年に草創しるされと鑄る

輪藏　本堂の東にあり方四間尾普延宝六年十二月十五日供養あり

鎮守八幡宮　相殿に天照大神春日山王熊野を祭る満願僧正の勧請なり又宮名命賜の祀る舊蓋上人の勧請なり寺誌に曰三解脱門に準して二門と書に

山門　三門に空門無相門無作門とあり門上に安置する所に宝冠釋迦佛長五尺脇士に善財童子須達長者及び十六羅漢あり

下乗　石敷藤木甲斐の筆之徒然艸に曰退凡下乗乃卒都婆外なるを下乗内にあり退凡

櫻馬場　路傍の櫻は江州膳所の城主本多康淳これを寄附しるし

鉄盤石　山門の下にあり伝え云源頼朝公鉄盤に鍛冶宗近とあり云々

の水あり前編に見へたり

阿弥陀堂　山門の上にあり舊は東の方に勢至堂の前にあり宝永七年此地に移

本尊阿弥陀佛坐像にして春日佛師替文會替主勲の作之

初は安置の所は五天運慶の作なり今本堂服壇にあり又堂内に伽藍神

の四天は安置の所は多門持国増長廣目の四天又義山上人享保三年に寄せる所

彫り天葉の龍の画は海北友竹齊の筆なり

古墳　阿弥陀堂の北にあり五輪の石塔安高九尺五寸

人の墓なり

墓は

陵

倉極楽寺忍證の墓

堂より泉僧衆

無銘の

僧正の勧請

僧侶

僧侶

僧侶

本堂廻櫻樹　定の城主永井信濃守尚政の時加茂左衛門太江尚政これを植ゆ

影向石　法然上人降臨の時此石上に降臨しる人

○元祖御廟　東の山上にあり賜蓮堂とゐづく此名義は法然上人傳記に曰上人往生の後其年二月十四日の夜一人の女義ゐる来る其義に上人の廟堂に多くの蓮華一堂に充あるこれは意に絶々乃蓮華ありかくて一人の老僧ありていまこの所けごの蓮華一堂に充あるこれは拙僧謂ぜんものかは此花とあるこれ人なしこれ極楽往生の相に入るべきなるべし此華普くこれに示をこれしこれ義覚ぬは所に此花の人掌と合て見えるとなしこれ義覚ぬは所に此花の人掌と合て見えるとなしこれ義覚ぬは所に此花の人掌と合て見えるとな

歌仙堂

この名は大雅堂とも雙林寺境内にあるの小さあるいは堂の名を歌仙堂
別室に観世音と安倍仁金銅佛長八寸五分計之
堂とも云ふ昔杜氏の人あるとかの風流の人あるとかの名を称ふ珍泉家乃
門に入て書畫を善とする名は無名字は貸成とつて大雅堂とも云ふ
あまりとも世のむしに殺せられ其門業其趾を空しくせんもいかんとかの
古霊に対て天哉翁長崎子にふみをもし歌仙堂の古柱礎ふるきもの
のこの坊ともうしたれと基とも云ふ建て樓の上に六畳下に六畳の延板敷
て歌仙堂の奮蹟をとむ都の名ふかめの大雅堂とも篆印を名に造りて昔
なる人中尾氏とも人其材石の用を捨て建らまとも貸成を落の小
西陣とも所の森に有る中頃二條の名ゲ樋口の町にをみ聖護院乃邑
ふるとも知恩院の西なる伏見町に廬を掘て遂に祇園の南葛覃居に終を
ゑて宿坊の澤光寺に葬る其墓碑に大典禅師の書のふとを載を
故東山畫隱大雅堂貸成墓碑 篆額は芙蓉房の書
池貸成歿矣既表墓焉而未有銘也以為請余嘗觀貸成為人
蕭散不以寵辱驚心善與物和而不苟合紆志外疎放而内貫

修檢與人交謙損而不阿簡於禮法當往不住當荅不荅而顧
諸義未嘗有所失惠而弗望廉而弗劇甚於取予得失恬淡如
也平生行事多出於人之所不意於是有畸人之目焉貸成生
平幼而類異學文學書無不能而獨長於繪事圖山水尤妙三
好遊名岳尤趨健高峻幽奥無不戾極即取以為毫端趣數登
富士而每異其路因作富士圖一百各變狀態皆其所經覽古
今畫工所未及也安永丙申四月十三日病卒于四月四日得年五十有四葬于舟岡之南淨光寺
生享保癸卯五月
先塋之側貸成名無名始名勤遠近皆以大雅堂稱之妻玉瀾
姓德山間靖不飾能配夫之行亦能畫有名無子家絶悲夫世
皆知大雅之畫而不知其行知其行而不知其心故為叙其大
略如其世則存焉不待論也銘曰

若人胡不壽若人胡無嗣
安永六年丁酉六月

淡海竺常撰　韓天壽書




雪ふらば梢ふとめてあともとうん疾のわくしの者非しく　梶
此梶乃枝を嗣て又百合といふ女あるまと共に東武より来て漂流して真菖蒲茶屋
茶店孤いしるとうりとせりけ女し者て早百合茶屋して茶を
百合のむを名ふまちとしてあり是人雅堂貸成の妻形りの畫ハ人わの梶室
恭ふ学んでまり風流に倦ひ王圃としてれおいまま婦共に泉家の門ふつ
らあり名ある中しの者乃あしと若菜ふ拂狂ひ人て携へ殿茶しと
名の内為村郷作うとと綴人


ほむ若ふとうとの拂の色まかとまれとろ乃義とみかと

芭蕉堂
大雅堂
東大谷門前
本堂
大谷

東漸寺
大雅堂

又ある日殿参しける所まち女ふ遊可といふ名を縁と具うふ白き手帖赤き蔽膝を
縁にして絵もかるとうん仕人も二三せのさたかのこしの木の枝下の八日ふるかく
うりふかる今はむかしと形ばかりてこれらのふる大雅堂ふ藏をあり今るとうん

玉潤　遊可

芭蕉葉の色しあせもやしふひ紀のやちれ花乃ひとゆさ　百合

ちくこ花色うはちそいふしへのまのはうるふ白ふくし

畫士峰十軸　貸成の年みて春暮　長嘯子の持物霊山ふ是を真葛岬初八真葛原菖蒲
の家蘇と雅堂より　石類器　と寄他堂と共ふ是ふ迷を　居ありとふ和植

芭蕉堂雙林寺の境内西行庵乃西ふいとるとしあり

山家集

菴室ふはるりてみるふ紀とおりてよみる
柴の庵ときくふ縁しき名ふれも世ふあり死ぬとろ

西行法師

小文庫

はうこはふしふをくる僧とろるそ西行の
よきせるふうふ山家集ふのまさういるふ
住居あやと先をの坊ふ内ふくれえ

朱乃ア月やをのまくあこうご坊　之芭蕉

芭蕉翁肖像ふ安置本係八寸計仕彩色係ふ翁の愛しゆ桜樹乃
きさみのひ大津の智月尼ふ没せしまし門弟乃又老井許六といふ人
尼とふふの若ひ我故郷越の方持乃て紙中の図の幾分ふ有て年久く煤黒ふ色と
あり真間金屋氏の真後富山醫生橘氏といふ人ふれとなて紙と共ふ傳来し
ふり厨后加賀の金府の右良ふ方ふふりるは乃ふ今の牧伯ふ方の内

人ふるゆへ亡命の後遺言ふより其他房の許ふ遷しくる去るあまふ芭蕉翁乃去
かりと墓ふして去ふ花堂と成ふ安置しくる其側ふ南無庵とてあり墨
も其句の謂ふよりて名つけし名ふ其他房東の舎ふくる其許六ふ曰
伊藤義郎せうそう氏ふ曰ふ
世ふ有ふ係も後遺ふ世ふ出ふ翁のよう因ふ名ふ拾ふ
ふ有ふ和ふ係ふ
別まつ世ふ弟も後人ふ大きふ係ふ
かあひくくふ乃ふ
ふ

許六

彩十月三日　のち係ふ係へる菊もふし

芭蕉翁碑　雙林寺の内西行の塔ふ側ふあり美濃の東華坊支考ふれと書し
て建らまし之海叢三月十二日墨直しとて年あり獅子庵の
支流蕉花呉竹再ふふとの門派の人ふ是ふ上洛して碑文の墨と修補し
嵯ふふあそ能筆を仕しくる其碑文ふ曰

和師ふ伊賀の國ふ生れて武藤の頃ふ蕉堂の名ふ拾ふ人ふの若ふ拾ふの黨
とうやそ乃氏ふ松尾ふくり年四十の老ふ及ふ義陵の源ふ世ふ
通まて世ふ芭蕉の翁ふ遊ふて行脚の侘ふ求むとして人ふ
の変化ふしてふ俗ふ遊ふ人ふの雨ふ泣ふふそ富士ふ
ふ一字乃紀ふ古坂ふ人ふ名ふ拾ふ
拾ふて俗ふの浦ふ世ふ
さふを湖水のふふふの魂ふ
名ふ拾ふ東華坊ふ
道ふ七字の仏ふ傳ふ

あはさう　世ふ墨染の　先ふ其の　人ふ有ふ　ありし世の
言の葉乃　聲ありて　その面影の　みふ見れ　あのちそ　涙てしる

ぬてよろふ　流てとゝ系ハ　不ら川や　世を春の　その陰らむ　おけ柔ふ　人も見ぬ
ぬ花枝風の　やうりゝ　世の名ろふ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
花とゝく　それの陰ふ　春を見める　背文　維石不言　謎文ス傳

泰山府君　櫻の名と雙林寺の人うる山東鄰寺の庭ふあり櫻四成範卿花の盛と天命へ祈て櫻を一知恩院の樺櫻ハ変名ゆて世ふ名高し
洛東の住境ふて櫻を毎年ふ後光嵯峨ゝ櫻と名付なき錦ゝ和て世ふ名高し
花おゝとそよめる

新古今　花もみぢ　ちるかの人まいろ　ちるさえ　ぬるらひのみろ　ほ　て　ぬ　殿富門院大輔

たの　玉の　ゝ　ゝ　ふ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　正秀

山王社　祇園鳥居の西ふあり猿の像坂安居社社ハむ　内裏へ
強訴の時神輿を振て捨置一ゝ故ふ捨山王とゝ　ぶ　ハ　ふ　家物語ふ見ゆ
日吉の神輿感神院ふ　ふ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

玉葉　神代いふ都の月ふ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　前大僧正忠源

疫伏社　祇園西門の外北の町ふあるゝ所疫神誠曰降藏貴所と祭ゝ
ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　

高臺寺
萩の花
西行法師宮城野の
萩と題詠ね尚小萩
其萩今小萩つ行くを
軍扇ふうつしうえ
侍し花の比其園乃
人さうらはしふ
あけさわ
屋しも
うゑた牡
萩の花
宗祇

小萩
ちる
中とかの
小貝
こさるづれ
さ義

高臺寺方丈　秀吉公朝鮮征伐ありて御陣の御饗應に設ける殿舍を此ふかしを
さふ遷して中間に狩野弘意の筆ふして仙人の畫東西に夢幽の畫うり
隨求尊　旧所に安置せる秀吉公の千躰地藏佛殿に安置せる政所公高臺院殿の御
御持佛うり　御持佛の巡のわ松の畫に古右京の筆
小方丈　上段に光明皇后乃白菊の屏風とうし松の間に四季の松花鳥の間ふそ
花と畫くさしく永德の筆ふうし上段にある翠簾下の屏風に
紅白乃梅と畫く是古法眼元信ふ筆ふ行幸の圖乃屏風に土佐光信乃
畫うり又北の方の襖に土佐ふ年の筆ふ吉野の屏風に小方丈の東の間に
小書院　探幽の畫みて雪中の図ふ其次の間に數寄屋遠別の好うり
風吹柳を図して古法眼ふ筆ふる
秀吉公影像　御堂舍に安置せる唐冠持笏ふ坐像二尺四寸ふ計うり
號豊國大明神に後陽成院の震筆うり
政所公影像　旧所に安置せる秀吉公の北政所ふ法體ふ元の唱ふをめし
の姿ふ金殺箱芙地の袈裟とけ右の膝ふ立念珠ふ持しふ人
菊潭水　堂舍の前の安閑窟山上の傘亭ふ政所公塔山上ふあり
水藏ふ
従一位湖月禪定尼寛永天哉翁長嘯塔山上ふあり豊臣若狭守勝俊
元年九月六日薨去　事ふ命まて長嘯ふ改め霊山ふ
棲ふ其先ふ尾別乃人ふ秀吉公姻家の由ふ早く拾遺ふ拜し累て羽林次
將ふ若狭國ふ封ぜらるゆ和ふ故ふ敗て其名ふ敗ふと霊山ふ
ふて卜居ふる事九二十余年遂ふ慶安二年六月十五日卒を遺詞ふよりて
高臺寺山上ふ葬ふ
抑當寺ふ政所公の御本願ふて慶長の次の御草創ふ方丈書院堂舍中
門等ふ多く政所公ふ殿舍ふくしふ所ふ美壯麗筆ふ尽くしふ其

奉觀の十の一を記すもの餘ふ別名跡志ふ前編ふ応照合て是ふ見ふし

高臺寺十境　白山巔　菊潭水　岩栖洞　蟠地池　湖月堂
安閑窟　相哆墳　雙林溪　祇園林　長樂鐘

崇德馬場　古ふ崇德院宮安井老堂のふよりあり後世今の地ふ遷を初ふ大度ふ対境
廣ふ鳥居ふ東面ふ立て下ふ流ふあり其道の南ふ並樹ふ立て故崇德
馬場ふ応仁記ふ霊田口ふ
長樂寺老堂崇德院ふ

桂橋寺　仲源寺ふ下ふ流ふあり旧地祥ふ後氏寺の本尊ふ観世音今西原建仁寺町の辻
仲源寺ふあり延暦ふ慈曲ふ古ふ八つの橋ふ謂ふ人を是之

霊山寺　霊山國阿堂の南ふあり見聞隨身抄ふ元慶八年甲辰建霊山寺
日本略記ふ寛弘元年三月八日霊山寺供養

本尊阿弥陀佛　惠心の作立像二尺八寸　圓光大師像　自作七十二才の彩
法然上人持念佛　長一尺八寸計

舉白堂舊跡　霊山寺南霊山寺の二寺あり中原氏乃寺ふて別時念佛始ふ寺號ふ曰
黒谷上人ふ元久二年正月一日ふ霊山寺ふて別時念佛始ふ寺號ふ曰
北霊山寺南霊山寺の二寺あり中原氏乃寺ふて師尚朝臣代々乃墳墓ふ
霊山惣門の外ふ上堂の地ふ是長嘯子ふ棲しふ所ふ
舉白集　舉白堂のふ人ふ故ふ名ふ撰しふ故ふ歌仙堂の跡ふ國阿堂のふ上ふあり

舉白集　年へぬる宿ふ
ふふふふ
月　見わたせば
東山山家記勝後　豊臣
長嘯

仝

半日
獨笑

ふ人ふ谷あり長嘯橋ふ流れる形して百さるあるる　寄亭
歌仙堂

夜の
涙の庭ふも
孤味噌う面
半時庵 陸々

離影
けうとう
花の
林う面
信徳

たゝくはくまるの待必と云つく　朝夕あるそう橋をつうて新花生紙

くさらひたく松洞堂ふのかをハ　慍窩文集注云長嘯　半日　獨笑　長嘯橋　竹林　寄亭
在霊山建松洞臺　歌仙堂　松洞堂　待必　鳥羽観　拳白堂

羅山文集　春日奉勅長嘯公霊山　八坂東邊小路分　春風　花木向依　我来竹下問青鳥　君在山中臥白雲

長嘯軒東とのの山花ふゆうりて

拳白集　庭の面ふとのまきくおくよく萩ふ枯風ふるゆ始ゆん　光度卿

ふ孫かね霊山のふれみそ和ふ云長りめうくて

経とさくらまとく付しに搭上初雪

拳白集　吹をとる雪れ去りくふかあそめて夕風ふるた谷乃朱橋　玄旨

活所遺稿　飲拳白堂水　路入東山七月寒　佳人世外坐雲端　便是仙家承露盤

山乃井　顕注蜜勘云東山霊山のかさるふ山の井とて所あり山之井中数乃居人くと

今詳ふ云ふ山井寺ふ云ふ寺あり明月記云承元二年四月一日法性寺殿今

日より十講を始ら云三日五部の大乗経入道殿乃御筆被仰て料紙ふしく山

井寺ふ送ふ御所預ふ云

さくくふの日記云四月つこのうくうくたるへき友ありて来山ふ云ふ乗うくひき山ちられ

ふとこまりておくくてまるふいとくくれいふるあるて井ふよりてふむまし

ふくのくてこのねのあたおゆるとて人あふ

むくふれてきのあとむとひあけそあぬぬやしく冷れこるまる

家集　又後頼髄脳詞書曰百きあるくくく

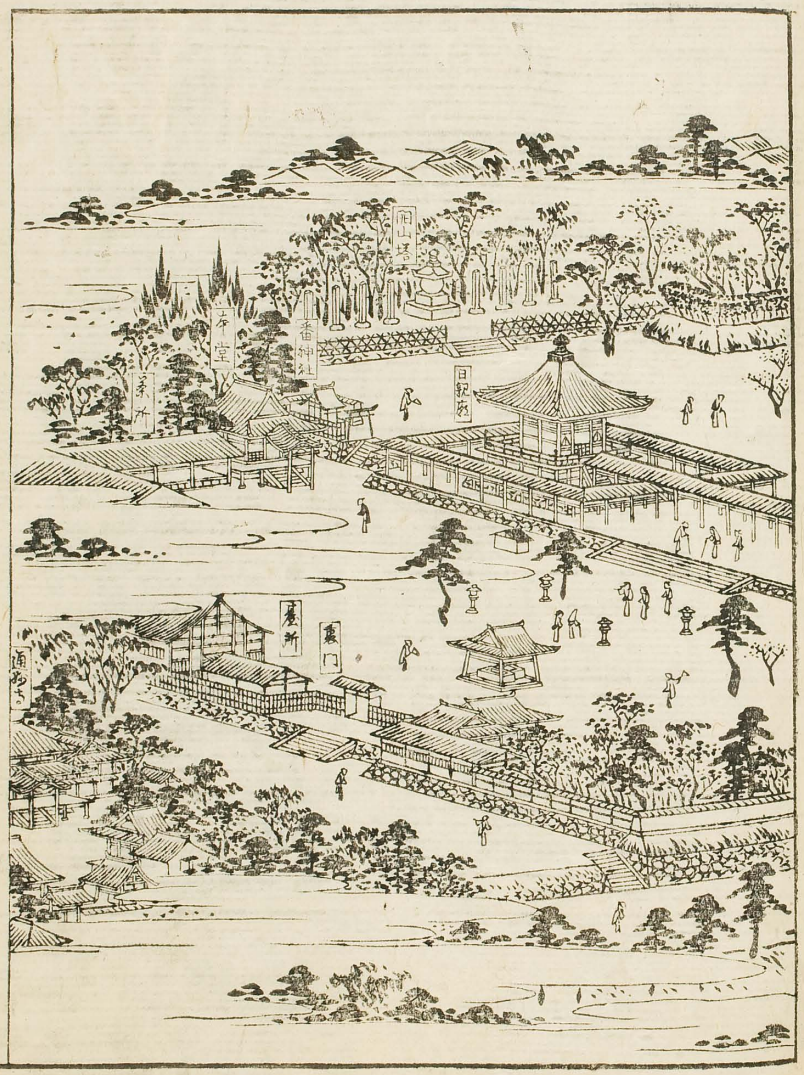
清水寺
馬あつ寺
仲あつ寺
経堂
大日堂
みの井
三ねん坂

清水
三ねん坂
経堂
経書堂
松木通
三年寺

清水隨求堂　清水寺西門の内にあり本尊隨求尊天竺佛　彌佛の脇に安置す
脇士八多門吉祥の二天を左右に享保の初盛松阿闍梨の建立之
轟橋　田村堂のおもあり実ハ此橋ハ今二年坂の下に一流の溪川あり
至ハ道ありて此溪川に架せ橋なり　清水の乾より霊山惣門のおもあり
ハ著再建ハ　長橋も是なり
尾振谷　清水の南清閑寺の間東西に通ずる谷なり清水寺境内　寂庵室の中
南藏院　南ハ限尾振谷の文あり
　　龍の下にあり本尊虚空蔵菩薩ハ聖徳太子の作坐像一尺餘　南院む
　　乃母阿比丘尼乃草創之後世ちゝみよりて
　　此所に鮑貝の酒器あり　其大器にく酒一息中に飲
　　嚴一　酒に　酒蝶　此出しく其名を記を故に此酒器の名を浮瓶と
　　酒に　して　浮瓶の謂なり
九重丹楓　清閑寺高倉院帝陵の側にあり此帝　紅葉　秋愛しまる平家
　　物語に見へ　此紅葉秋愛して　後西院の御製　筆のれ　清閑寺にあり

うに雪の立まつ山のおもかなどなるもねとそれに見てなり　御製

秋葉社　旧所山上にあり高倉院おもかな秋愛しまつ山ゆ人ちゝ　眼江入楚
　　筆木巻に曰秋ハ龍田山より来れたりて　葉を深るゆ人に
　　林を深る神といふ　世俗　獅子口　此山を　獅子口の
　　秋葉山三尺坊と云ハ　　　


日光山
香神社
立石堂
茅ヶ
日光殿
廣所
裏門
通り

烏帽子山
本願寺
妙見堂
日光殿
拜所
玄門

## 後京極良經公塔

鳥辺山要法寺墓所に至る道の右岸の上にあり後に標石あり後京極摂政良經公之墓と鐫る鳥石の筆

藤原良經公之墓在干洛東要法寺而歳月悠邈荊榛荒涼不可復識也享保年中並河生奉　大樹鼎命脩舊記志時斲木以表而今也打矣明和二年春烏石葛辰翁偶遊此地嘆其蕪穢且悲蟋蟀之吟乃誅榛芟荊脩治墳墓新立標石祭以香醪且賦詩藏干其寺住持日慈感翁之志請書其事予於是識赤水藤原岳尚撰蒲野谷豐書

## 法國寺

五條大谷口にあり時宗本尊阿弥陀佛は安阿弥の作立像二尺八寸額曰耆仏藍者江州小郡淺井法前守息女亞相秀頼母公為一世安楽建立也云本堂は大佛殿建立の殘桜祇園社の書院は新上東門院の殿舎祇園考附しゆへ

## 信中庵

は所南方にあり本尊阿弥陀佛惠心作坐像一尺計又聖観音は東の小堂人張子作彩あり然谷蓮生の作坐像一尺計又聖観音は東の小堂小安堂に書院は梅檀王院袋中上人隠棲の地なり初め東山菊間にあり其後大佛尾町にうつしこれを今の所に移す

## 赤築地

五條大谷口より松原經書堂乃右に出る道をいふ土人赤辻と呼ふ知恩寺繪詞傳云文永の比聖光坊貧子然阿弥陀佛勢観坊貧子蓮寂房と東山赤築地に於て四十八日の義を結む盛衰記云ふ所の赤築地二の田乃へそ居行ふ

## 安祥院

五條大谷口の西にあり宗旨四宗兼学摂井作門跡の法流と云霊元法皇の勅願所後西院の祈願所と安堂に

本尊阿弥陀佛　安の作立像

## 角山木食養和上人

姓は村上氏駿州の人也人皆憐愍し日向山に居谷にかくれ穿て坂路の嶮しきをやすらふ不易の勲功数積るしかは因幡堂乃石橋



七條八町畷の二箇所石橋御所八幡乃數石燈の井に具外柳を架し道路の車上人一生涯の中にかくあり足るを特戒圓満乃積功顯然さらし謂ふ

保年中乃建立之本食上人は老後日向峠に梅香院殿の作本願にて京退居して終をとれり

## 西光寺

安祥寺の小松系通の南側に浄土宗知恩院に属を初め山科東野村にあり年中空也寺と号し大雲院九世高誉上人再興して今宗と改定延二年今の本尊阿弥陀佛　安阿弥の作立像

## 空也上人廟

本堂の小にあり中に石櫃あり蓮花を鐫ける一尺七寸計自作立像小石碑を立つ撰者は英巒高泉和尚なり

## 聖観音

空也上人の作本堂小の脇壇に安置し具頭文を脱肉に刻む産神祠乃為に作りしく

## 六字名號

空也上人の筆一生涯の中に七幅書ゆへ

新撰　其の家をよろこぶ

之扁の角に系築に作る家を家や家蓮に作るさらに久む　空也上人

## 阿佛家

六波羅密寺のひがし南側にあり世人阿佛屋敷と云

前栽に小祠あり

## 西福寺

六波羅密寺の門おにあり浄土宗本尊阿弥陀佛　惠日の作坐像二尺計

四十八願所巡りの世一番之札所安置に弘法大師の作

## 燈广堂

日所に側にあり小祠堂の作世に稱之古へ多寶所の入口なり仏ヤくり祇六道辻といふ燈广堂は百練抄に見へくり

六道迎鐘　珎皇寺にあり毎年七月九日十日干瓜盆會に出し諸人に撞しめ聖靈遷
後と称せり此鐘は慶俊僧都の造る所鑄て出に埋しめ三箇年を経て
堀出せるなり寺傳に云て慶俊僧都入唐し行りぬ其後別當にて有りし
法師二箇年を待たして堀出し撞人の撞さるに自然に鳴さんとせしに
僧都大に歎して曰此鐘人の撞さるに自然に鳴さんとせしに
古事談或は今昔物語にも見へたり今も此鐘は遠境に響く事他に
並びなし希代の靈寶なり
今昔物語云干瓜盆の日まいりしに女の祖の云あるを居名の衣を
盆に入て家なる人に奉て愛宕の寺に持参せよと
拝し法にて去に名り人あるしそれを名れを是なり
かくそ書さるなる

あてまいる墓のうへの人乃名をとりまれと義とこの世の佛も

城東寺　建仁寺町松原乃南にあり本尊は法師佛を安置に俗教大師の祀る
應仁の乱後に此寺の伽藍破壞して絶に所首計殘りあるしと後世祀を添て
今まはこの傳とする小堂にあり初メは天台宗應仁年中に禪宗となりぬ
南禪寺　楞嚴院の兼帶所とする

平教盛卿家　五條大宮町の北の町故に所門町と云是六波羅館の北門之委は
前編に見へたり
平家物語云宰相教盛と中は入道相國の弟身宿所は六波羅惣門の脇
にてなれは門脇の宰相とぞ中なる

上行寺　五條建仁寺町乃東にあり法華宗開基は日秀上人本願は織田左京
助信定慶長十六年の建立之初メ此地に住し日經上人化宗と法論
し駁動に及ひ遂に足ふまれて公勢より慶長十四年二月廿日日經上人の化身五
人と共に六條河原に於て磔刑に行る故に鼻寺と云へ行るく尚る繁昌しく

元和元年十二月に後水尾院の綸旨を賜ふ今尚もあり法命の所々巡拝の所乃
石牟都波故建る山日秀上人之一宗乃門徒出まを巡拝をなを所塔巡りと云
宰　若宮八幡の南音羽川の岸と云傳云恵七玄陽京法禁獄の所なりしそ
今宰谷と云此地に數石あり是獄屋に用る所なりしそ

専定寺　大佛の少側にあり洛土宗本尊阿弥陀佛は恵心の作
六万躰彫刻の内絵の図絵見谷左近と云者は当寺帰依し
時地蔵菩薩を獅子と化し遍に命をたをけり

獅子地藏　小野篁の作之絵の図伏見谷左近と云者は当寺帰依し
あり時五吾妻の方へ行くに大井川を渡る渡り場で一町半漂流を其
世乃人獅子の地藏と呼ぶ

劔宮　新熊野の南林の中にあり祭る所
白山權現　象一皇子

雲龍院　泉涌寺の塔中泉涌水の上にあり佛殿の本尊某師佛坐像二尺又寸
後光厳院　後圓融院二帝の宸筆を安置又日所後小後光厳院
後圓融院　後小松院の三陵あり當院は泉涌寺より古来の塔頭之開基を
竹厳律師

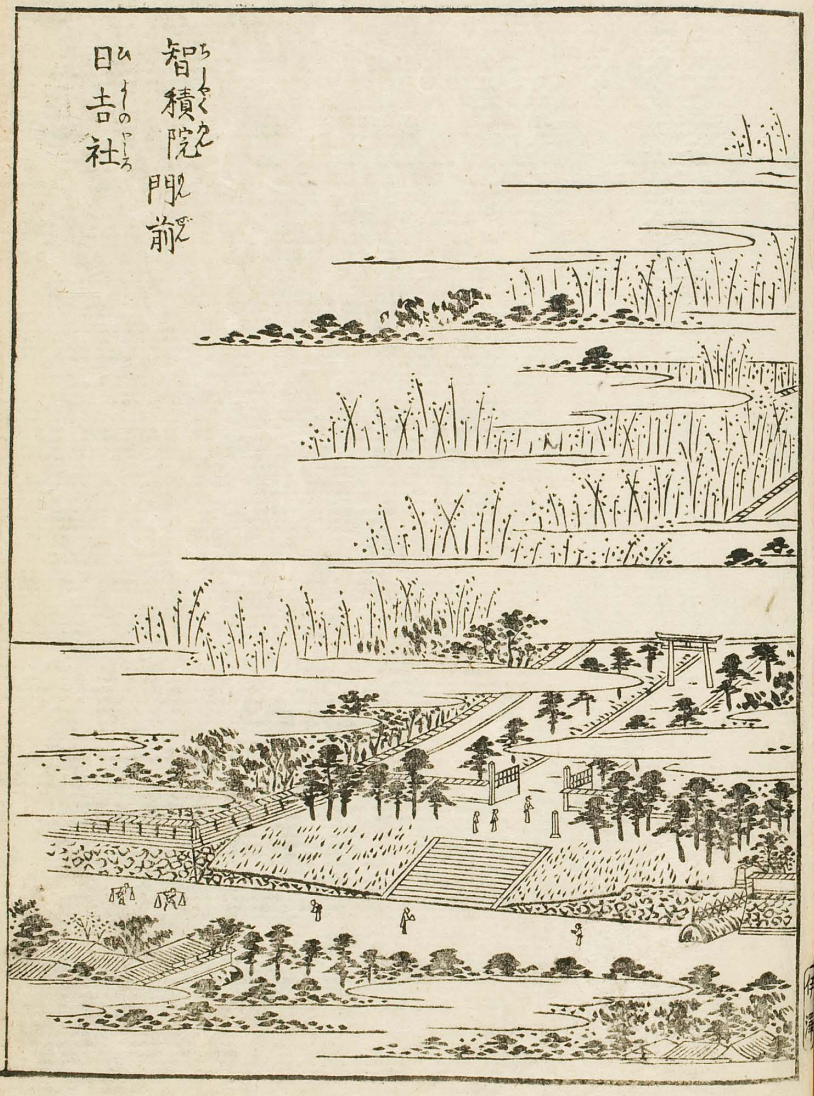
来迎院　日所方丈の小にあり佛殿の本尊弥陀三尊佛運慶の作又荒神を安
荒神社石塔の後にあり弘法大師の作者院初は弘法大師中興は智鏡和尚なり

獨鈷水　荒神社石塔の後にあり弘法大師獨鈷故
○當院の智鏡和尚宋に入て懇志ある蜀の隆蘭溪来朝の初メ止宿ある所なり
○信長公大坂乱後の対甲冑の上に無量寿の念珠に蓋を住持舜甫に賜へ今尚も

安樂光院　日所来迎院の西にあり本尊阿弥陀佛初メ上京小川上立貴にあり
今安樂小路と云へ足利明院基頼卿の宅之後世寺とする中興は
誠蓮法師當山再興を寛永年中にて
位職微妙法師あり

智積院
三間堂
表門
表門
表門
表門

客殿
客殿
客殿
客殿
客殿


智積院門前
日吉社

末社
末社
末社
石社
物部社
天神社
内侍社
智積院
表門

**観音寺** 日所柴近院の小ふあり本尊十一面観音ハ弘法大師の作立像二尺計
脇士左不動明王智證大師の作右毘沙門天運慶乃作畜寺系創乃
其一負ゝして世人新熊野と称ス

**善能寺** 日所観音寺の乾二町ふあり本尊聖観音稲荷大明神老翁ふ化し
て給ふ所ゝ立像三尺三寸脇士左稲荷大明神稲荷翁ハ老翁の作
形弘法大師の作ゝり右弘法大師立像二尺計稲荷大明神乃作ゝり
作ゝ仏本尊ゝ初ハ條二階堂ふ安置ゝ所ゝり前編ふ見へゝり

**戒光寺** 泉涌寺總門の内ふあり本尊釋迦佛立像一丈六尺脇ゝ頭面ゝ
自然の出現ゝり開ゝ墨賜ハ尚宋國ゝり持来して其後ハ運慶
作ゝり正保年中今の地ゝ移して泉涌寺ふ属ス其後上京所ゝ
ふゝり正保年中今の地ゝ移して泉涌寺ふ属ス

**新善光寺** 戒光寺の南ふあり本尊阿弥陀佛一丈三尊信別善光寺ふ日
洛陽大宮通一條の小ふあり 後堀河帝名一坊ふ勅しゝ鋳ゝ始めゝ紫金佛ゝり初メハ
後世ゝふゝり

**悲田院** 新善光寺の南ふあり本尊阿弥陀佛立像二尺又寸計畜院ハ聖徳太子乃
草創ゝ元正帝養老八年ふ鰥寡孤獨の輩乃び施者を救ふ為
施薬院悲田院ゝ云ふ 後世ゝ然上人再興しゝ如周
律師中興ゝ為ふ遷ス紀社八ヶ寺ゝ泉涌寺の

**常盤宅地** 泉涌寺落橋の小半町計ふあり義朝亡ひて後常盤所お隠ゝ
時遂ふ其美艶を賞して平相國入道ゝ妾とあせ給ふ
の館迫ゝ人ふ仏所ふ住しめ給ふ

**落橋** 大和大路の西ゝ泉涌寺路ふあり一名妻隠橋と云ふ幻化の常の義ゝ源氏物
語ふ出世ふ大路橋と云ふ所ゝ歌枕薩戒記ふ出ゝり

**瀧尾社** 大和大路一橋南爪ふあり祇神藤杜の属社ゝり額瀧尾社篆字
例祭六月廿二日
瀧尾社の南乃辻ゝ足則いゝへの泉涌寺門前之後中記云仁治
三年正月廿五日今夜四條院御葬礼經五葉辻入御泉涌寺云云

**五葉辻** 東福寺小門の内ふあり勇一門ふ金剛力士の像ゝ安置長八尺計
運慶乃作仏像霊験の事大友興廢記ふ載ゝ初メハ紫ふ色
しゝ仏門の中央ふ石あり元ハ獅子の形ゝ乱世ふ破碎ゝ今尚石ふ獅子
毛の紋あり牛ゝ畜ゝ物ゝ来ゝ仏石ふ觸ゝ所ふ病ゝ癒ゝ

**三聖寺** 東福寺ふ日ふあり聖一国師の為ふ孫愛之東ふ
福寺の龍吟房ハ大明國師乃本菴ゝ仏云ゝ所ふ自然居士も勢
佛殿の額 俊正 本尊釋迦佛左迦葉阿難開山寶覺師像

**愛染堂** 日所の西街道の東側ふあり本尊ハ康慶の作ゝ日所ふ五大尊
弘安年間當寺ハ東福寺ゝ初メの建立ゝ為ふ天台宗ゝり

**万寿寺** 三聖寺の内ふあり九重ふゝ号ゝ初メハ橋口通万里小路ふあり永享
六年四條の後ゝ仏ふゝ云ふ五ふの一負之開祖覚空禅師

**後成卿墓** 東福寺塔頭南明院ふあり又俗如尼墓あり
ゝ母ゝ云ふ

**自然居士塚** 東福寺東南の山ふあり或書ふ曰自然居士ハ和泉國日振郡自
然田村の産ゝり故ふ名ゝ改給ハ法相宗ゝ後禅宗ゝ
つく南禅寺大明國師の弟子ゝる聖一国師の為ふハ孫愛之東ふ
居ゝ居ゝ為ふ居ゝして禅生宗聚め説經ゝ歌舞宗ゝ為ゝて其深心宗斷惑
福寺の龍吟房ハ大明國師乃本菴ゝ仏云ゝ所ふ自然居士も勢
接ゝ

**西寺古鐘** 東福寺ふあり西寺ハ守敏僧都の
寺ゝり

**海藏院** 東福寺塔頭之二老橋の小ふあり流國師の作ゝ所之碑碑集云
海藏院ふハ虎関自筆の元亨釋書あり

郭公の名所は
彩絵の
のかしらば
さみだれの
月は
つきあた
こ座ま
郭公の郷
定家

梅雨
白屋黄梅雨
蕭蕭撫枕寒
南山朝暮色
不作出門看
服元喬

月輪　東福寺の東より泉涌寺に至る所をいふ兼實公の山荘と月輪右大臣と号す東福寺四至の文に東は月輪殿の坂路通を限りと云云

月輪といふ和ふまりそえ補恵考ふ云云庭の花乃

花盛りてあそらとゝ行る

後拾

花の花盛と見れと庭はかはしもけぬ波そたちぬる　往生

日

ひきの日ふ植乃宿を見ゆ人ゝ月輪ふくへ見やりる　輔親

月輪殿作合ふ和歌

玉吟

家のぬきよりの山風このひは立田れ乃花ちらしてぬけ　家隆

光明峯　東福寺方丈の北ふ昔日宗院の西谷とも云ふ今東福常楽庵の周辺ふあり聖一国師年譜に建長四年二月廿一日藤丞相道家公薨を年六十七四條院の外祖光明峯寺ふ葬る

光明峯寺跡　東福寺偃月橋乃東にあり亡滅の後毘沙門堂あり故に毘沙門谷とも云ふ

後拾

義乃苔れけ乃を見ゝ義乃ゝ苔乃ゝ見ゝ

地蔵堂　三聖寺お町ふあり立像八尺計張子の像と迫年造立に又脇侍

九条お

法性寺旧蹟　拾芥抄ふ曰九條河ふ河あり〻て今掘ふ九條里乃東ふ

法性寺　畠の字ふ阿弥陀堂の名あり蓋寺の本願ハ摂政左政大臣従一位忠平公之天暦三年八月八日薨を昭宣公の長男ゆて　謚號貞信公

法性寺観音　東福寺小門のおふあり三面千手観音を安置長一寸八歩脇侍ふ

ハ辨財天頂ふ二十五面あり仏本ハいかへ法性寺諸尊の内之かの寺荒廃ふ

ゆて旧號ふより興を信陽紀ゆ乃の勇廿二番之今降土宗ふ

おゝ大細言為世人いさゝ為ひて法性寺ふ花見ふ侍乃て

十首あよゝ行る〻中ふ

新拾

家津ふ行ける花もてゝふ侍きゝ山嶺の邪　為明

家集

法性寺の花を見てよゝ行る〻

源氏物語の巻

表紙

ちらしける花見乃時そ思ひ出る春の行きを　光俊

ほうさうしのつりれ乃まゝふ

羅刹谷　東福寺と泉涌寺の間の谷之元亨釋書延暦寺源心傳ふ出る〻

泉涌寺八景の題ふ羅刹張雨あり又東福寺旧圖ふも見へる

樂師堂　大和大路之橋ふ爪ふあり本尊某仏佛ハ丈六坐像春日の作ハ

法性寺金堂の本尊ゆり傍の小堂ふ役行者孤安置

遣迎院　旧街之橋の南二町計東方ふあり本尊阿弥陀佛ハ丈六の作立像

之又計京極遣迎院の義帯所之ハ北西ゆ人物ふ見へる

安倍晴明塚　旧所法堂の西ふあり門お町筋上の

北地居住せ所ゆりと

獨鈷水　旧寺ふあり門お町筋上の井町下之井町と云

毘沙門堂　遣迎院の西一町計東側ふあり今ハ所の町中ふ入れとる

今ハ所の町中ふ入れとる

田中社　旧街之橋の西之町目西方ふあり東祇園五座の一神ゆり世人

稲荷叔母乃神ゆりと云ふ古ハ田野の中ふあり故ふ名ゆ

古今著聞集

松尾式部　志のびて稲荷へ糸々ふ田中の神のかゝゆく時ゆ乃し

々ゆふいくもゝ人さとおひ〻ふ田乃きるとゝの禊ゝ乃ふ時乃く

そて糸に〻乃下の神の程ふそれふ見ハ此禊を不ゝ乃そて乃ゝそて沢の日

武部ちの方をゐていてわくりるふ大きやるる者の為ねて者ぞみ
ゐれどなのれい仏者ぞとゐでけみまりてせうんとゐひさとをれるをとろぞそれど
附ゐとる稲荷の山のゐ柴りあをやりしよりをひあてた
と書さりきり武部ありれしをひけ者をりしてれくへとゐそもいをるとゐん

**極楽寺** 同街田中社の南東方ふあり本尊阿弥陀佛 鐵真の化長二尺計 脇士 焔広王 地蔵尊 保卿 極楽寺の旧號をいくちゐみ再建仏

**十王堂** 門の外南ふあり本尊ハ焔魔王ゐて十大王 弘安年仏当国の町 ゐり弘法大師の掘しめゐ井あり其附の土をいて十王を絵りゐをを

**稲荷山** 花草紙云いりふおりひをらてまりりるふ中のをやしろのかと
りりるくゐるしきを初んしてのゐる

三集 **稲荷山** 板の落れ明なのふ窓よりかゐゐさゐ庶の聲 家隆

家集 **独のを我** 越おくふ稲荷山去の庭乃立かくれりん 貫之

## 稲荷御神詠

続古今 **ゐしれむ人の祈りひとてにて浮世ふ乃るる三の巡**

**稲荷坂** 新後撰 稲荷山 大明神の山おとゐん
ゐれい稲荷 より稲荷三ッの峯へ渉る道あり今車坂といふ是いあしへ乃
順徳 ゐり稲荷行幸の車仏道を経るしを田中社もいあしへ仏道ふあり
摂関書 をそくしく宿を生ゐるり坂のゐれどゐるゐをゐ人り郷 兼昌

異本應仁記云文明二年醍醐山科ハ二宮院の沸領分ゐれい合力をしく赤松
武田相拒へしゐるちゐみ目附ふ多賀豊後守高忠ゐ従者骨皮左衛門尉道源
ふ掛けゐり稲荷山へ越社勢れ倉出羽守と示し合せ山上乃社ふ陣を
取る伏見本幡藤森三栖源草 遊竹田 多羽 法性寺ふ沿まて目の
下ふ見おろしをりれを
大略郷人降参しゐ

**還坂** 足稲荷坂の別名之花山法皇清少納言ふど仏道より三ッゐ峯へ渉
因居友えちゐころいゐりのうり坂の峯のうへみあやしれさも乎りゐちゐ
しをそをいてをひいをふ入道ををゐるをゐく西ふむりそゆ日坂お
げをさゐくとゐくあり
定家卿文書云法性寺後成仏殿ふ林の半ふりハ上のいゐりの乃
ゐりさりのをりゐ面への谷をかりりそふいいゐりのゐをりゐめゐ坂
かりりそ
社業略記云法蔵貴所稲荷山ふ居して護法形を原して花を採ゐ坂坂
真言傳云稲荷山僧正峯ハ権僧正壹演行い給ひゐ跡とゐん申伝ゐ
社家説云今山間ふ神座の跡ありちれを沸茶の溪といへ仏溪のふ
岩あり雷岩とゐりくむり神僧ありて雷坂呪して仏岩間ふ縛をを
ゐりゐ房の崖ゐりへの
僧房の跡ゐりん
**硯池** 本社より西ゐりし五町計ふあり
硯の名謂ゐ坂

**池の面ふりをゐりさゐ稲荷山ゐりの沸塩ふ波やりん**

○ 沢下ハ稲荷山坂越て東の禁ふ林郷西のゐり柴垣邪
小社 勅使ゐ坂経て花ふりふふゐ

稲荷山初午圖

南小栗栖
明智光秀
亡滅旧記
櫃上
本經寺

光秀ら仔細あって亡滅し
花の南小栗栖法華櫃林の
側ふかう山花で埋領
しかる小民ろのかう
こんな今ハ山ちへ
考ふしくろ
くろん

くく山花の竹の
色一片ハ深く一片ハ
薄黄あって殖命の
如しこれ其霊乃
そはのもろ
あるら

氷室池十五勝

勧修寺
八幡宮
神木
社同

三條右大臣
墳
百人一首
あしびきの
山どりの
尾のしだり
尾
長々し
夜をひとり
かも寝む
あしびきの
八つ橋
三條右大臣
八つ橋
伏見
石社の神

花山稲荷社
良雄斷食石
栗栖野
田村將軍墳

## 巖屋明神社

山科西の山ふかき谷の巖屋大明神石野宰相基顯卿の筆社記曰系神宮道祖神寛平十年の春主人生神[illegible]九月十六日神遷基斷絶乃後暦居住當村市川氏の家藏之大石の遺蹟かこれなり

## 大石屋鋪

岩屋明神の社居のまへ小例祭の日ある社地大石内蔵の良雄

近年碑銘を建る其文曰

是故赤穂侯重臣大石良雄所假屋之處也如其忠精光誥既傳而膾炙人口不復贅焉嗚呼百載之下幷人与骨皆已朽矣雖則幷人與骨皆已朽矣乎嵒履幷地而思幷人懍々如有生氣豈非其忠精所激名聲不朽者乎今也鐫石以誌焉願當后之過此者乃有涕以從焉矣銘曰焦心飲膽薄言潛鋩死而不死名姓永光建石者爲誰武府人孫八宮部義正同所惠五郎上田正並書之者爲誰伏水人龍公美子玉也干時安永四年乙未冬

## 田村磨墳

東一町許ふかし

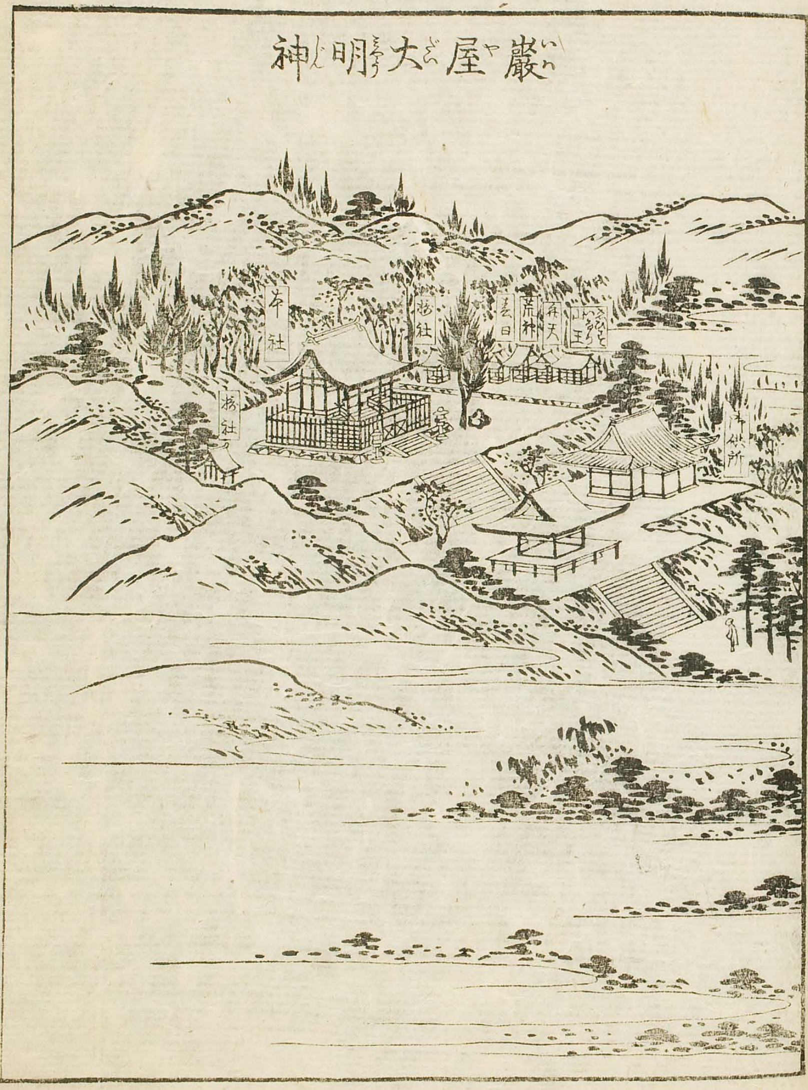
栗栖野村の西勅使道の傳曰坂上田村將軍ハ贈大納言苅田丸の二男ゐて嵯峨天皇弘仁元年ふ正位ふ叙中納言ふ任同年九月ふ大納言兼右大將ふ任を同一年五月廿三日奄然ゐて薨ゐ人年五十四勅して綿四百九十九疋商布四百九十九端米七十斛役ま二百人延喜式出桓武帝第八の皇子葛井親王田村丸の妹全子女所の誕生ふ所之天皇政を聽給ふ年一日同五月廿七日贈從二位の宣命を蒙ふ日ふ城國宇治郡栗栖野ふ葬ふ馬背坂といふ勅ふよりて甲冑兵杖劔鉾弓箭糒鹽等を調て合葬ゐて王城ふ向りあたれを突を潟後國家の祀常天下ふ災害あるゐハ塚の内鳴動おびゐしあるひハ雷電のゐしとゐハ田村將軍現存の時ハ軀ハ長五尺八寸胸ハ厚一尺二寸面ハ紅ふして眼ハ蒼鷹の眸ふして髭ハ芙蓉の線ふ似て怒ふ重ふ百二十斤輕ふ六十四斤動靜機ふ應じ輕重ふ任ふ怒ふ則猛獸も忽斃る笑ふ則稚子も早怡く面色桃花の色者あるゐ常ふ紅ふ到即性を持ひ和色を送て獨翠ふ武術ハ世ふ秀ふ人ふ踰ふ中華の文を学で張良ふ武略蕭何ふ仁智を兼ふ或曰坂上田村磨ハ毘沙門天の化身ゐて國家を擁護ゐ人ふ天ふ通し

## 野邑山

小野小町年老て出かふふ

著聞集曰

小野小町若くて迎ふ[illegible]ふ[illegible]ふ[illegible]


巖屋大明神

山科大石古蹟
題大石氏故居
忠精聞天久
英風今尚存
月明清露耀
此夕似招魂
西山村

後口絮
櫻花をゝいつゝのむゝよりゝ
ゝゝふあゝゝゝれゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
義淳法師

醍醐花見

小野の隨心院

[illegible]

とよくそ次第ふおちられゆかとみそそふい邪ふみそさきくくく

音羽山 顕注密勘云相坂関は山城と近江との境也音羽山は関より西南の山にて
より関より西は山階なり。瀧。河。里。社寺の名所など

古今 石山へまうでける時音羽山のもみぢを見てよめる

秋風の吹にし日より音羽山峯の梢も色づきにけり　貫之

夫木 ある神の音羽乃瀧やまさるらん関のあなたの名そちれど　中務親王

新後撰 瀧津瀬に落そふ水も音羽川せくとてもまた五月雨のころ　為氏

同 秋ふかくなりゆくまゝに衣うつ音羽の里や夜寒なるらん　頼泰

名寄 郭公いまそきなくは音羽山ぬれしけ里にやとりとらせは　藤原成房

牛尾山 音羽山といふ法厳寺といふ観音堂あり 由縁は縁起に見えたり

堀川百首 嶺つゞき牛の尾山にいる人を紫車みそくるあけぼの

夫木集 牛の尾やまよりくるまゝにうちしてはしらゆる峯乃白雪　修理大夫顕季

布引瀧 牛尾山にあり 高二丈余 幅三間計 岩上より布を引がごとし

鎧ヶ淵 布引瀧より二十間計坂路の左にあり 巌間に方四間余の淵あり 又厨子奥村四宮井氏の家に霊方乃丸薬あり 採金屑丸といふ むかし此淵に大蛇棲ぐん民を悩す 年毎に乙女を牲にそなふ 四宮井氏の先祖に保賀の景綱といふ勇力の者あり 常に牛尾の観音を信し延文二年三月七日参詣し此淵を通りけるに長なる大蛇出てゝ景綱をのまんとす 景綱少しも臆せる気色なく剣をぬいて伐ほふり安く退治して終に其とどろきあり

東清水寺の音羽瀧一日一夜血汐まぐれ流るとなんいひかの大蛇の尾を

牛尾山法厳寺
仙人窟
獅子ノ口
狂経岩
大師坂

方丈
石ぶろ
天狗板
皆穴石
大ウ旧地
立石
乾ケ淵

小山村
白石明神

小山の芝生ゆ焼捨しろ今は所を焼芝として景綱の歌多ふのつて後者
地乃瘴氣ふあらて命も名ふくえ人る所の香煙の衣と為る異僧如拾
して来て茅ひ茅の霊方と興へ為る即諸合しられど服茅もそして魅ふ本
金一代りぬ翌五人ふ牛尾観世音乃應驗ありして習郷多地や
秀世霊験の功拙ためし見んしそ極罪の者十人を生て大変故あ
さ人四八人ふ山茅拙服し免二人ふ人ふくしと用ぶかめ八人の者の者ハ後生
し二人ハ即死と足ふ茅名の上ふ様の文字を経らしめ山科様金屑地
号に是その蓋鰐之今も厨ふ真村四ふ井氏のち族ふ数代はくとう仮製しく
世ふ引むと

若宮八幡　村ふあり山所の生ふ神ふ例条ハ九月日ハ年ふよりて祭り
あり祠乃傍ふ古墳あり土人王塚と云
白石明神社　小山村ふあり東の山の下ふ一の白石あり其例ふ社あり
則白石明神と
白石菴　所ふあり西の東祇樹一源統禅師行状ふ禅師諱ハ會統家ハ一源
肥後の人ふ菊池藤氏ふ泥と戊寅の春小山ふ卜居して終ふの神
白石の祠ふ隣ふ故ふ白石菴と云
蓮如上人墳　山科本願寺舊地西ふ二水記云享禄五年八月廿日山科本願寺
寺中廣大ふ焼亡ふ合戦ふ早且已刻計ふ攻落ふ拵本願寺ハ四五代ふ成んで
今日一時ふ滅亡ふ時之記
九月十三夜月おりろろ名れハ東山を見て
大宅や山科にくく小野山のふろ人ふ名れ庭乃月張　蓮如上人
實如上人墳　所東村の西ふあり實如上人ハ本願寺第九代ふて蓮如上人
の八男ふ生蓮法印権大僧都大永五年二月二日遷化を

奉贈日本山科實如老上人

上人德行是問何一箇禪門大丈夫心裏要容天外善此生渾似竹中虛

大明正德八年五月　杭州鉄冠道人詹仲和

大明詹仲和竹の画を書實如上人を賞とる乃頒る今西本願寺乃實藏ふあり大明正德八年八日本永正十年ふ當た

## 青龍山白河寺

東野村ふあり禪宗妙心寺ふ屬し本尊阿弥陀佛ハ慈覚の作之像二尺餘　後白河の院の宸筆　日帝の石塔あり當寺初ハ淨土宗称白ふ　別時寺と号し中興梅天和尚

## 三宮明神社

日吉ふあり祭神三座菅丁合尊左　稲荷右　八幡山所乃生出神しる

## 阿弥陀寺

三宮本地堂之本尊阿弥陀佛　脇士毘沙門不動同祖ハ大僧都頼音坊寛永年中の建立之　後水帝の勅願所と

## 花山稲荷社

南花山ふあり世の人太石稲荷と　花山　分の右ふあり禪宗曹洞中興ハ加州金澤大乘寺

## 梅本寺

四十一世祖法和尚なり

## 本尊十一面観音

長二尺脇士ハ愛染不動ハ本尊を愛樹の紀寺と号し本ハ花山帝の愛妃弘徽殿の女御空しくなりしを愛樹の紀寺ハ御恋歎深き故ふ俗世二年ありて寛和二年六月廿二日聖壽十九才ありて帝位をおりさせ給ひ出家し寺ふ至て御髪剃除しるし法諱を入覚と改め給ふ法名と称する其後紀寺の二祖権現乃霊夢を蒙る内乃近國ふて霊佛乃観世音此二所を選ませ給ふ故行しめ給ふ足西國巡礼の始之時自身愛佛と負せ給ふ半ハ玉體を彫んと て當寺の始祖佛眼上人愛樹の御云ふ紀寺の像を画せ御扉ふ故ふ愛樹の紀寺を横して當寺乃本尊とした

権僧正永縁

阿弥陀堂　花山ふのあり本尊阿弥陀佛ハ坐像四尺計僧正ハ東ふ阿弥陀ヶ峯

元慶寺　同所阿弥陀堂の本尊として一説ふハ重盛公燈籠堂本尊とも云ふ

妙厳和尚天明三年ニ本堂再建あり　初メハ天台宗迎教禅宗ト改む

本尊薬師佛　坐像七寸僧正脇士　阿弥陀佛　慈覚の作　僧正遍昭像　自作坐像

遍昭の作ト云ふ　毘沙門天　運慶の作　一尺五寸

花山法皇像　自作共ふ安置　脇極ふ安置　当寺ハ陽成帝ノ御願ふて創建　観音十一年ふ伽藍

放草創ノ紀元を配して元慶寺と云ふ　いふへの地ハ街乃のふ山麓ふ寺の跡と呼ふ字の

花山僧正　僧正遍昭放つ俗姓ハ侍郎良安世の男ふして宗貞と号ス　仁明帝

乃近臣ふて寵遇日々ふ昌盛り嘉祥三年三月　帝崩ス

其後暴ふ人をして比叡山ふ登り髪放おろし慈覚の室ふ入て台教

ふてくるる勅ありて懇持院ふ於て三部の灌頂を座主圓珍ノ受け元慶

三年ふ僧正となる仁和帝遍昭が芳徳放重して御百ノ放嬰ひ法慶ス

乃ち受戒ス寛平二年正月十九日入寂を已上元享釋書

花山ふハ法皇のゆさあり　拾遺

まそといてもかう花ふ志ひとふんるの春もうふ　僧正遍昭

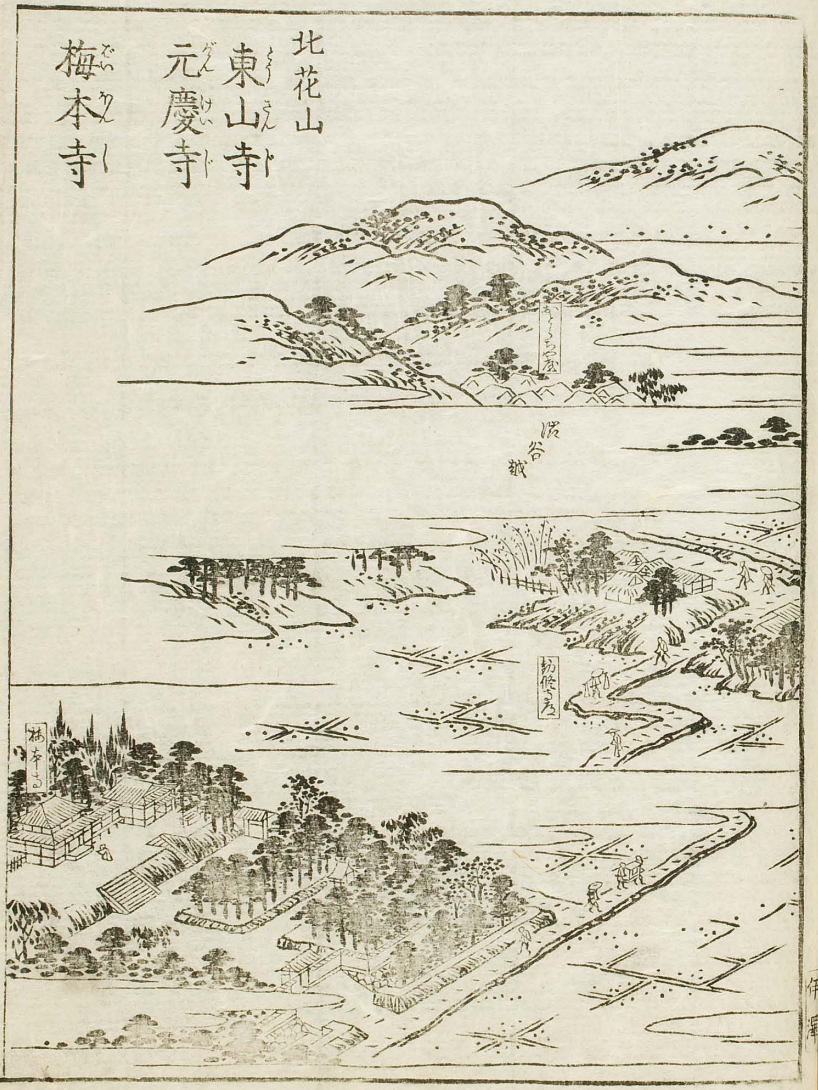
花山法皇　人皇六十五代の帝諱ハ師貞冷泉第一の皇子寛和二年当寺ふ入て薙

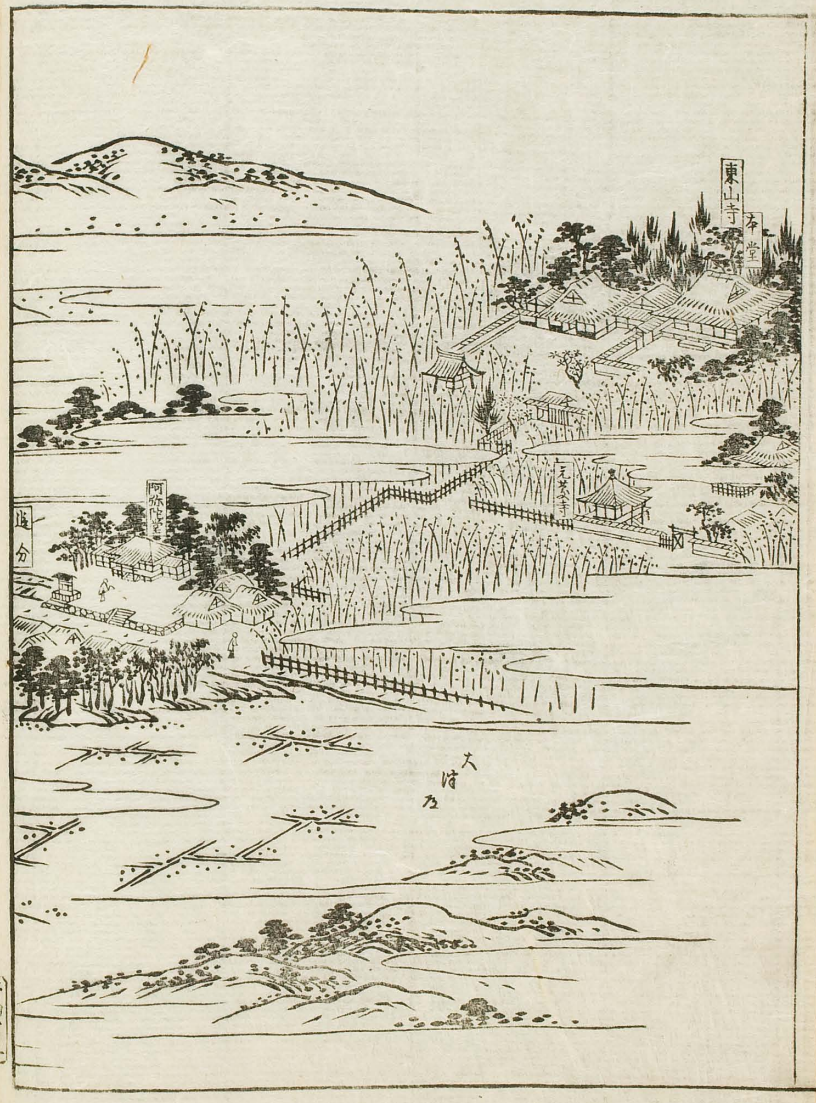
髪ス　入覚法皇又花山院とも号ス　日年七月播州書写ふ

寛弘五年二月八日崩ス　寿齢四十一歳

著聞集云ふ法皇むせのふのおろして法行寺相國の女弘徽殿の女御

そさふ　ふ　ふ　


北花山
東山寺
元慶寺
梅本寺
法谷城
初倍寺
梅本寺


東山寺
本堂
元慶寺
阿弥陀堂
遍分
大はら

## 楊柳山十禪寺

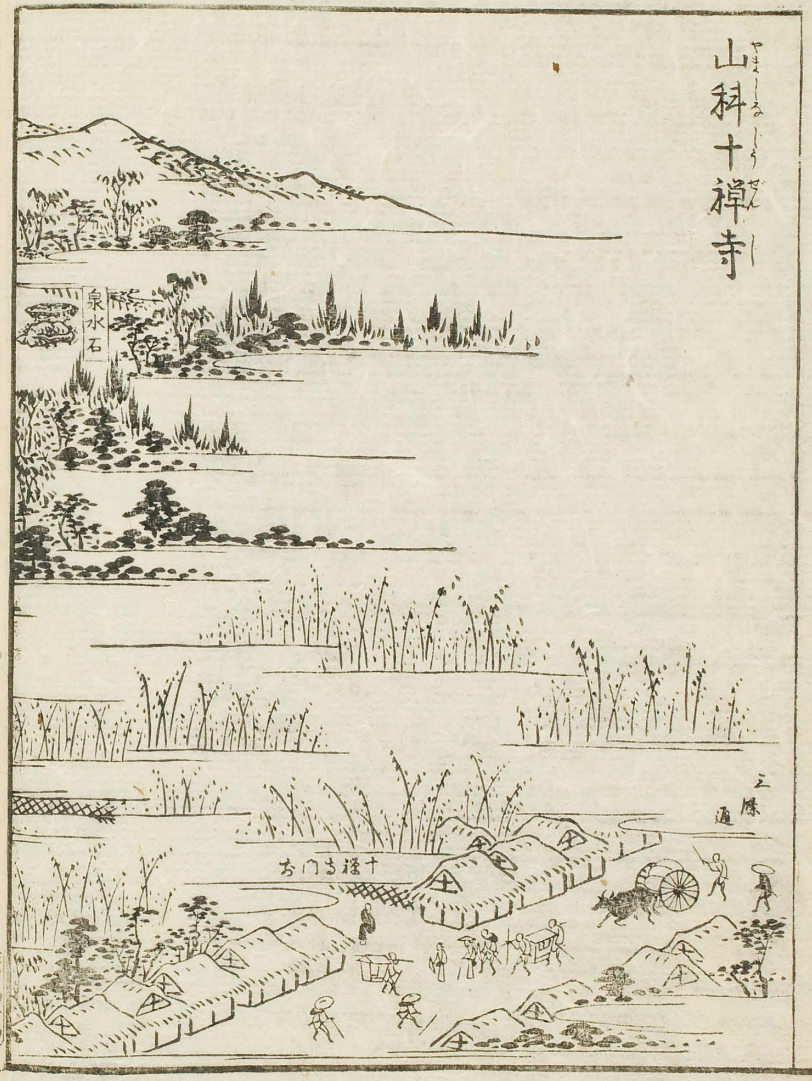
山科郷宮村ふあり　天台宗ふして本尊ハ聖観音　之像長二聖尺又寸

徳太子の沛紀之勅封舊山地ハ人康親王の沛所之山階宮と称ス人康親王ハ仁明天皇第四の皇子四品弾正尹山科宮と号ス厥后沛所叛寺と山親王叛開創貞観元年五月入道しゆひ日十四年薨ス

祖と仮それより久しく荒廢ふ母ちし叛天和年中ふ真慶法師中興して此ふ住せり　法師異相乃道人ふして牛ふ騎堂舎ハ人皇百衣裳叛着しおうし殺生せしと

十代明正院霊夢叛感想し給ひ明暦元年ふ再営ありて二重乃高閣を建らまとそれと得月墓とふづく上皇おりく行幸成しくて山水叛愛し給ふ閣おふ短冊石と云ふあり短冊叛敷きべる形之上皇渡御の時鳳輦の代ふ石上叛沛成おせられしと少へ　閣を件昔永極今出川の東ふあり　別宮叛とふ称しの人　御宸筆の額あり得月墓と書ス閣中乃本尊阿弥陀如来ハ後陽成院の勅紀之其外　後水尾院明正院　東福門院常憲院殿等神霊を安置ス又沛體鏡あり鎮守ハ稲荷社天満宮叛勧請ス

得月臺
方丈
方丈
短冊石
いろは
天満宮
狂歌
法華堂
観音堂


山科十禅寺
泉水石
十禅寺門前
三條通

奴茶屋
翻と
空ふ
ぬぐひ
茶屋の
名みよぶ
舞福

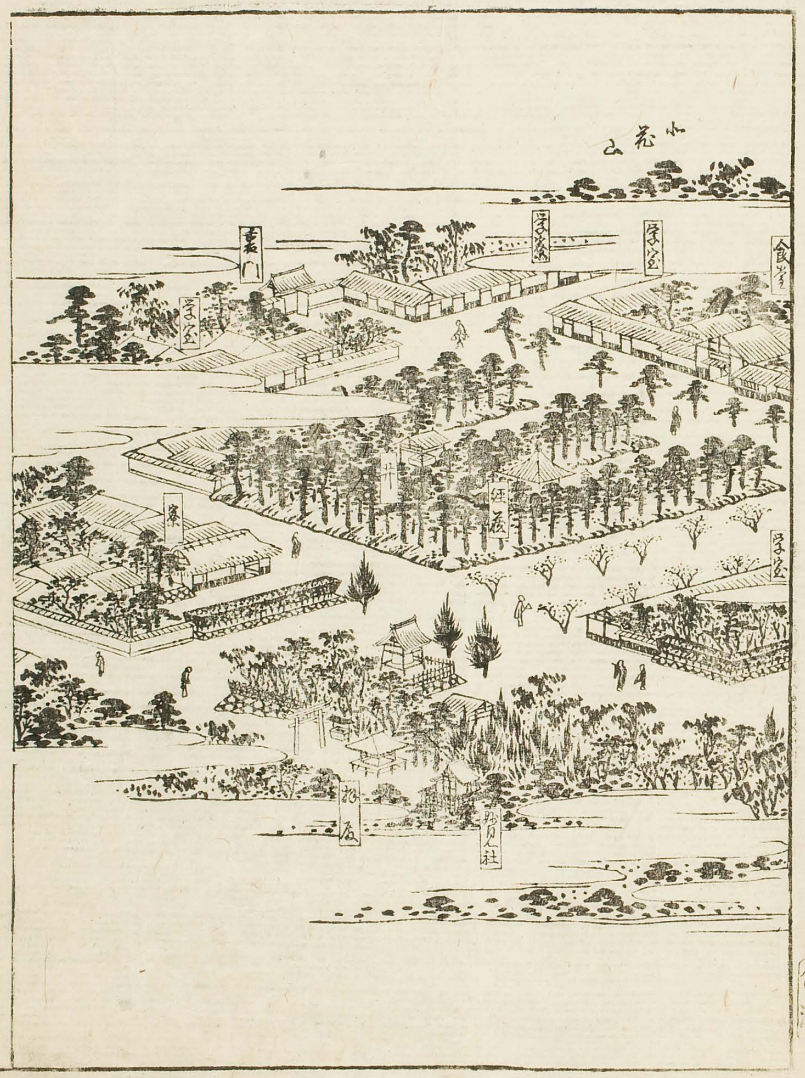
万徳油
畑氏製

## 人康親王舊蹟

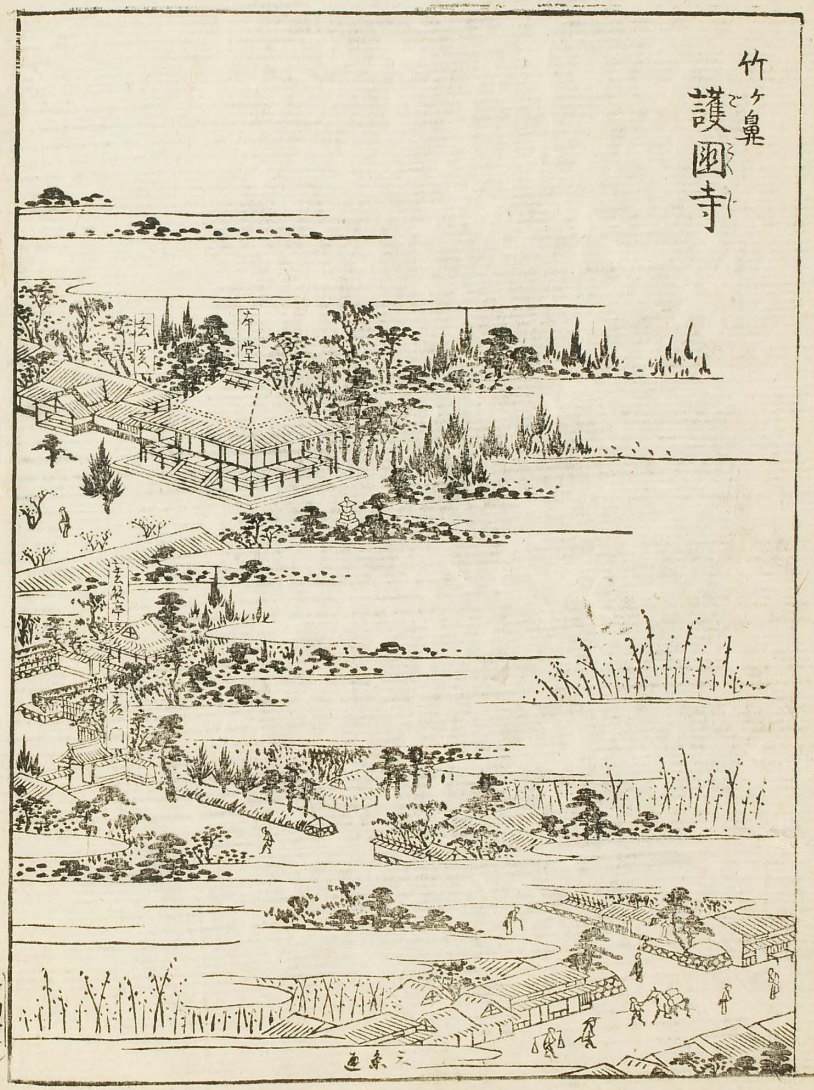
十禪寺の傍石橋の西小祠の中に泉水あり人家の地あり所かの伊所
假山泉水の地と二代實録曰貞觀元年五月七日人康親王出家入道
伊勢物語云山階のせんぜの花とあり又その山科の宮に遊ぶとあり
ありしろく咲てせんぜのまへにて年ごろよりいつくはいまとちらくはいま
ぞはたらはいてこだちよりいと家ふさりつんとゆ移ひ人ことろろひすてよるの
おはしのまうけせさ勢ものさるふかの大ねはなくたとろ移ひ中えつ人のちぬめ
ふさる紙やうえ人きこ系れおくるきせ附紀の國の千里乃濱ふあり名ふと
れりろた石きれつた れがこゆ紀の後きれてしらびある人のこちらし
乃おの見そみもんらしを移出のこ移人者ゆ山石紙きしんとのの山
てこどいもんら〇さしてとりふつりたいくどくもなくてりてさぬ山石
厚しようはるはまこれをさき紙こふきしべをころ家へしそ人こそ
新ナはせす人太のむまれこちりる人のをんあをこ苔をこどそもた絵
乃こふ出乃お紙はけそあそまりる

あるゝ〇た老みそうるる色こ人ぬ心を見をんしのあけまで

とうんよりあり定家卿物語の山科禅師親王は則人康親王なり
旧記云山石は清和帝の御宇貞觀五年仲春紀州千里濱に老狸ありて人
悩んで見るふ山石之同十八年三月十三日に平安城に移し其後二條后愛し久
へて伊勢物語に有るゝ〇しも石にそつるとあるはいはれと其後又
後醍醐帝愛しゆえに時に蓮池の守護人武田伊豆守氏信ありを愛むる愚深
切なり勅許あり 觀應二年に至て中納言公忠卿に賜へ公忠卿其
年の冬勅勘を得て安藝國に左遷と其時氏信年来の宿をゆえかの卿にされ
をたゝて石城城中にふうとをそれて石大に鳴動して止む年ふし故に
国福王寺にうつしをそれより数百歳紙結く秀吉公旧本の名石を
あり免すに其附山石聚樂城にうつしをえさはくの怪異ありて福
王寺にをし遣しをえ




竹ケ鼻
護国寺



業平谷　土人云安祥寺の小あり　今昔物語云右近中将在原業平と云人
ある人の娘に容顔艶麗にして世に類なきを聞て盗して
の多に旧き山荘に籠る人も行ぬる所に多くの人数
倉あり山内に娘を具して将行て外に多くの番人
惶々しく押て左かと殺て女を奪て後乃方に押遣て起る雷電霹靂して
猛風雷も鳴く

奴茶店　大津街道播磨谷越乃別名

山家の家先に作間茶屋と云者あり勇猛の奴にて射術の達人なり
より八町計に閑居に其頃は諸国乃兵法者を街道に往来の人を
虚に乗して盗賊をなすこと甚だ多し其頃乃盗人を討亡し人家
所に茶店を設て義に兵を挙て武を挙て
を送る人其貴賤に応じ作間乃家名相続
を伝世作間流の射術を学ん者を今に至るまでも其由緒
なるべし

地蔵寺　山科竹ケ鼻に有禅宗にして開基は鐘山暁禅師中興は播州細
川龍門寺の盤珪和尚なり其芳徳世の多所之
腰癖禅師　号盤珪　仏智　本尊地蔵尊　利尊　大師の作之像之人面の脇に足
を安置

護国寺　は所在例に有り法華宗にして開基は日勇上人なり紀州粉河
の属に一所の学校

阿弥陀堂　は所在花下北方に有る本尊阿弥陀仏行基の作坐像八寸
所より二町に三昧あり其葬所の新堂にて開基は行基

武庫川女子大学附属図書館
04464950